**日幌　草太 （ひほろ・そうた）**

**１、プロフィール**

詩人。昭和16年頃から詩を作る。僅か３年余りの詩作であったが、「ともしび」、「芝生」、「草原」などの詩誌に作品を掲載した他、編集・印刷・製本を担当した。

＜生没＞

1923（大正12）年12月26日～1945（昭和20）年５月29日

＜代表作＞

「ともしび」（詩誌、昭和16年～18年、叙情詩を発表）、「芝生」（方言詩誌、昭和17年、方言詩「挽歌」などを発表）、「草原」（詩誌、昭和19年、詩「雪の夜に」などを発表）。

＜青森との関わり＞

弘前市出身。小野印刷所の文選工をしながら、同所の詩人秋村静映の影響を受け詩作した。

**２、作家解説**

本名は佐藤喜代衛。弘前市立和徳尋常小学校から市立弘前高等小学校へ進学したが、昭和11年父の死去により同校を中退。林檎工場を経て、富田町小野印刷所の文選工となる。同所の詩人秋村静映の影響で詩を作り始める。16年同人詩誌「ともしび」創刊。日幌草太のペンネームで叙情詩を発表、編集・印刷・製本を担当した。

17年市立弘前青年学校が開校し、佐藤は本科第五学年に編入となる。同校助教諭に、詩人一戸謙三がいた。同年方言詩誌「芝生」（カガワラ）が再刊され、「挽歌」などの方言詩を発表する。この頃、同所女工皆川きよ子に思いをよせた他、同所長小野吾郎妻きよゑを「かあさん」と慕う。

18年９月から11月にかけて、一戸謙三による「近代詩講座」（草原社研究会主催）を北島一夫らと熱心に受講する。12月同人詩誌「草原」第一輯刊行に携わり、詩「雪の夜に」を発表する。その一節、「（略）／北の国に生れながら／南の陽に息吹く草を想ふ私だつたのか／遠い流れの音が／それは私の心の内からとも知らず洩れてくる。」翌19年正月に、草原社は佐藤の送別会も兼ねて新年会を開いた。

同年３月、弘前東部第五十七部隊に入営。８月には、フィリピン ルソン島ブラカン州、帝国陸軍第十四方面軍に配属となった。12月にマッカーサー率いる米軍が上陸し、帝国軍との間に死闘が繰り広げられた。22年６月に北柳町佐藤家に届いた「戦死公報」によれば、佐藤は20年５月29日同地で戦死したという。

通夜の席での心境を、北島は「啞蝉　── 悼 日幌 草太」と題した一篇の詩に詠んだ。「君の戦死の知らせを受けてから／われはその面影を喪章の陰に鎮めてゐた／愛惜とともすると空しい嘆きを ──　／（略）／君を弔ふう蒸し暑い通夜の日だつた／ああ　われはその時／その（蝉の）羽搏きに始めて風の心を感じ／どうも死んだ氣がしねえ／と危く聲を支へ佛壇に飾られてある／君の在りし日の寫眞を眺めたのだつた」

**３、資料紹介**

〇詩誌「草原」

雑誌

1943（昭和18）年12月17日

230㎜×163㎜

昭和18年、一戸謙三を講師とした「近代詩講座」の受講生の中から「草原社」結成の機運が高まった。一戸は「めいめいが一本の草みたいにずんずんのびて行ったらよい」と激励。日幌が編集を担当し、「雪の夜に」など15篇の詩が収録された。